

昭和45年2月1日 第3種郵便物認可
平成29年1月1日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 沖 第10巻第1号



俳句雑誌[おき]

1
月号

沖
発行所

出初梯子

能村 研三

松山を訪ねて

十一月に、四国の松山へ行った。と言っても俳句の用ではなく、役所の行政視察で市会議員と同行したもので松山市役所以外のところを訪ねる時間がなかったのが残念であった。三年前にも役所の仕事で松山へ行く機会があったが、この時は半日を、松山城や子規堂、道後温泉などを自転車借りて回ったが、「正岡子規記念館」はあいにく休館日で見るこ

とが出来なかった。

今回宿となったホテルは、いま松山でブームとなっている「坂の上の雲ミュージアム」と隣り合っているところで、我々のスケジュールと開館時間が合わなかったため、外から建物を見るだけにとどまったが、街中にある「秋山兄弟の生誕地」は訪れることが出来た。

「坂の上の雲」は司馬遼太郎の小説で、秋山好古、秋山真之の兄弟と、正岡子規の三人を主人公に、松山出身の彼らが明治という近代日本の勃興期をいかに生きたかを描く青春群像を十年の歳月をかけて書き上げた壮大な物語で、本年の秋からNHKのスペシャルドラマとして三年にわたって放送されると言う。

長崎・出津三句

石積のド・口壁密に石露の花

冬ぬくしクルスをつけし鬼瓦

隠れ耶蘇住む一峡の冬日濃し

枯蔓の性根すはりし巻き絡み

もつたいな師走最中の誕生日

粒胡椒大ぶりに挽く聖夜かな

還暦の干支めぐり来し初明り

逆風に髪逆立てて厄詣

竹青き出初梯子の高さかな

丹の門に淑気四葉の釘隠し

『坂の上の雲』とは、封建の世から目覚めたばかりの幼い日本の国家が、やがては手が届くと思いがれた欧米的近代国家というものを、「坂の上にたなびく一筋の雲」に例えた切なさや憧憬をこめた題名である。これほど多くの日本を動かす偉人そして俳人が多く出た松山という地方の都市に大変興味を覚えたが、今度はずっとゆっくりと松山を訪ねて、念願の「正岡子規記念館」へも足を運びたいと思っている。

能村 研三



真青空

林 翔

幼時の正月

生後十箇月で母に死なれた私は、祖母に育てられたが、地方では牛乳など普及していなかった大正初期、おそらく貰い乳で育てられたのだろう。姉は日本女性の標準体型、兄は標準よりも相当大きかったのに、私だけは小さかった。

祖母と暮らしたのは長野県小県郡丸子町（現在は上田市に合併）そこでの思い出はランプの火屋磨きを手伝った事と、祖母が病院へ行く時に付いて行って、待合室で金魚という物を初めて見た事ぐらいである。

五歳の時、父が迎えに来て上京。途中、軽井沢駅で買って貰ったサンドキツチ、生まれて初めての洋風食事であった。

丸子での正月の記憶は全然無いが上京してからはいろいろある。わが家の門松は花屋で買ったか行商人から買ったか、質素な物だが、近所の大邸宅の門松には目を瞠った。友達

ただ一葉残る紅葉よ真青ぞら

黒点が揺れて鴉や大枯野

寒晴や千枝万葉みな尖り

ほそぼそと園の小径や龍の玉

竹林の蒼さ黝さよ雪ばんば

紫烟とは空へゆくもの底冷えす

聖堂の闕高しやクリスマス

焼諸屋とぶつかつて買ふ路地の角

酒だけは忘れぬと言ひ年忘れ

四捨五入で百歳の日も近し冬

も多くなったから、凧揚げ・独楽廻しをしたし、女の子とは追羽根もした。私の突いた羽根が近所の家の雨樋に入ってしまったのは、幼時の苦い思い出である。

上京したお蔭で初荷の馬車も見られた。大正期にはトラックなど極めて少なく、主に荷馬車だったのである。交通機関は市内電車（後の都電だが、童謡ではチンチン電車と歌われている）で、祝日には小さな日の丸を四本、電車の四隅に靡かせていた。

餅は田舎の親戚から蜜柑箱で幾つも送ってくるので、鱈腹食べても食べきれぬほどであった。

林 翔



蒼茫集

ひとつだけ

千田 百里

ひとつだけ点して秋の灯と思ふ
ゆるゆると冬瓜を煮る水を煮る
よく眠り霧の風景より出づる
衣擦れとふ永劫の美や文化の日
我が歩めば荒磯の径の冬うごく
ノレン忌の街に出づれば枯木星

銚子電鉄

遠藤真砂明

攻め焚きの窯鳴りに秋深みけり
いなびかり闇の彼方は真の闇
フレームに花摘み時の陽を満たす
鉄を断つ炎先が青し初しぐれ
銚子電鉄冬の太平洋どまり
冬霧の怒濤ごもりや外川町

時 空

秋葉雅治

落葉して天にまさをな解放区

先師に「位谷」の句あれば

冬に入る時空かかはりなき遺墨
やさしさのあとのさびしさ冬ざくら
北塞ぐ江戸川乱歩読みかけて
日矢射せば肅と声あげ霜柱

ベレー帽

渡辺 昭

諳んじてそびゆる師の句秋燕
小雪や古墨に浅き罐はしり
客土してかばかりの洞穴惑
色鳥や絵付の陶の波模様
小鳥渡るまだ遊ぶ気のベレー帽
捨窯にひかる陶片冬に入る

放射冷却

大畑 善昭

正藤節郎氏句碑建立

落葉降るなか降臨の神の声
朝方の放射冷却大根干す
菊月の日程表に婚二つ
紺尽す一天に蔓梅擬



日は水のたゆたひさるとりいばらの実
脱会と言ふをうべなひ落葉の夜

鳥渡る 松本圭司

鳥渡る空へ弓引く九十九里
良き風を帰燕に知らず風速計
海溝へマリンスノーの降りて冬
酔海鼠を噛む人間に進化論
廃船の竜骨鳴らし北風猛る
冬濤の秘めし力が巖を打つ

灯台守去りて 北川英子

道のりの遙か灯ともり冬に入る
人の世の裏行く水も澄みにけり
長き夜大鉄塔灯台の十九海里の閃白光
冬錠固し最後の灯台守去りて
海暗し誓子の木枯さまよふか
大錨 据 糸 冬 深 む 渡 海 宮

鉄 塔 安居正浩

木枯はまづ鉄塔を攻めに来る

綿虫を捕へて放す眼の遊び
黄落は眠りの序章峽の村
水引草忘ることの幸せも
磯菊の波に抗ふごと群れて
冬の灯台灯ともすまではただ白く

霧 笛 吉田政江

百余年の霧笛の消えて冬岬
九十九段螺階の先の小春空
大根引く加減とふ力覚えけり
倒木に寄つてたかつて山毛櫨しめじ
ガーデン挙式朝露に敷く赤絨毯
牛久シャトーの昔を残し葡萄枯る

活断層 辻直美

鷹柱いたるところに活断層
満月や大人もすなる鬼ごっこ
呼んでも無駄脱穀機稼動中
雑木林へつるばみいろの秋霖
金閣寺炎上の世代ぼたん焚く
初時雨茶筌すこしく性抜けて

潮鳴集



落葉焚く

堀口希望

兜太句を朗誦すれば天高し
青春の雀荘いまも秋ともし
棟上げの槌音高し秋気澄む
一書生たるを貫き落葉焚く
どこまでが川どこからが冬の海

息吸うて

徳植よう子

息吸うて吐かぬは死なり桐一葉
告知とはこんなにも重くつめたき語
「出棺何時」が最後の言葉星流る
モニターの波一瞬に消ゆ十月の朝
白菊のほろほろこぼる二七日

一刀

掛井広通

運強き日の澄む空を仰ぐなり
ばつたんこ水を一刀しては鳴り
音立てて凹む空缶冬に人る
灯台は白生む起点冬が来る
一枚の枯葉明るき方へ舞ふ

海底の山脈

藤井みち子

海底の山脈うごく十三夜
秋灯下ことばくだきてしたたむる
臍の緒の名残身にあり神無月
どんぐりのあをを熊の喰みこぼし
大綿やてんでんしのぎの海のこゑ

『宙を飛ぶ』

(自選二十句)

千田百里

率ゐるはモーゼか帰燕ひたすらに
寄り道てふ十一月の過し方
走り根にからむ奔り根獵期くる
シチューの火日がな守りてレノンの忌
機械語に振り廻されて年暮るる
切らずおく電源の数去年今年
初茜ドボルザークに酔ひながら
パーティーの女人ばかりの寒さかな
海鼠噛む金塊わづか死蔵して



カーナビに冬の出口を教へらる
春一番二番三番四回分の塵
絵文字の男逃げ春陰の非常口
優柔の髪切つて春闌くるなり
宙を飛ぶピザ生地エイプリルフル
十三日金曜晴れて桜桃忌
眼裏のパリも刻みしパセリも青
氷カルピス初恋の味とも違ふ
水無月のみ空みづいろなる不安
星涼し楽器箱にて眠らむか
夫留守の酒欲り刻を鴟高音

『絹の波』

(自選二十句)

柴崎英子

炎天を戻りて何もかも白紙
裁ち絹の波を立たせて白露かな
眠り蚕のうすうす青む遠嶺晴
寒波来る夜の橋しんと水位下げ
いきいきと太字滲むも吉書かな
母やつと笑つてくれて豆御飯
着ぶくれて己自身を見てゐたり
大花野こころに少し波欲しき
夕風のぼら待ち櫓前のめり



朧夜のやがて声なす師の遺墨
深大寺蕎麦に人待つ涼しさよ
舟虫を散らす一步を楽しめり
四囲の山引き寄せ飛驒は雪の前
仏みち富貴寺の萩にはじまれり
曾て師の踏みし句碑径露ふかし
きらめくは鬼剣舞を了へし汗
寒行の声濤となり渦となり
万緑の中産声は男の子たり
相輪に月満ち来たり薪能
白魚の水ともならず売られけり

年間二十句

主宰選

小林奈穂

鳥籠を高きに吊し成人祭
美作みまさかに三鬼と次男つぐおふきのたう
ビバルデイかつて教師よ青き踏む
春服の芯ある男だと思ふ
剣道の強豪校の桜かな
帆船の名は「あこがれ」や夏に入る
薔薇といふプライド薔薇といふオーラ
とりあへず並ぶ行列パリー祭
廃校のもう近寄れぬプールかな



緊張のハンカチの皺ふやしをり
螢や男のメールみじかくて
百日紅身籠るといふさびしさよ
八月の水八月の蛇口より
桃の実の熟しはじめてゐる重み
爽やかに別るるほかはなき別れ
二百十日喫煙室の隔離めく
秋惜しむ点りはじめし灯をかぞへ
捨て舟に日のよく当たる神の留守
短日のワインで煮込む肉野菜
湯ざめせぬやう火の色のバスタオル

沖作品



能村研三選

橋脚が島を真二つ紅葉晴

東京

七種 年男

柿熟るる唐人お吉に墓ふたつ

日溜りに声の渦生る冬隣

錆鮎の並びて焼かれ阿吽の相

新米を洗ふ指先攫はれつ

千葉

鶴見 遊太

きのふよりけふより明日うすもみぢ

熟れ柿の臨界点といふ容

昼の虫人の数だけ人の老い

秋時や上に自適といふぬくみ

東京

藤原はる美

ユダになる危ふさ我に黒葡萄

おにぎりの正三角形鯛雲

夕映えやひと待つやうに通草の実

黄落や昭和の残る丸ポスト

灯の海を窓に切り取り今年酒

夕さりの遠嶺浮き立ち鳴子鳴る

千葉

峰 幸子

蓑虫の蓑の綴るをいまだ見ず

ゼブラゾーン色なき風がまづ渡り

廃園の木馬離れぬあそび蔓

立冬の牧に高鳴る叱り杖

毛づくろふ猫の毛にある秋の色

市川市

和田 満水

三つ釦中のみ留めて贖日和

E T C 持たぬ車や穴惑ひ

肩幅も背筋もまるめ玉子酒

冬の濤礁の鼻につんのめる

愛知

近藤 敏子

高稲架の切れ間切れ間を貨車過ぎる

漕ぎ出でて湖岸きはだつ夕蘆火

小面に愁ひをのこし秋行けり

風音をヨーデルと聞く牧小春

強がりにはちち譲りかも蓮の骨

沖作品 15句選評

*
能村研三

枯蔓引きこの星すこし回しけり

七種 年男

蔓を詠んだ句では、「枯蔓」といった秋の季節感をしっかりと詠みこんだ句。例えば行方克己さんの句で「枯蔓の引つばり合うて縫れなし」とか、長谷川權さんの「蔓草の蔓のたたかふ大南風」のように「大南風」という別の季語を据えている句もあるが、宮津昭彦さんには、「蔓」そのものを秋の季語とした「蔓たぐり蔓つみ上げて終りけり」という一句もある。七種さんの句は正に「枯蔓」を冬の季語として詠んだものである。「この星」とは、まぎれもなく地球のことであるが、蔓を引いた時の実感がありありと描かれている。

熟れ柿の臨界点といふ容 鶴見 遊太

野見山朱鳥に「いちまいの皮の包める熟柿かな」という句があるが、この句も熟柿の皮をテーマにした句で、スリリングな状況が窺える。「臨界点」という理学的な言葉を俳句にしたと

ころも面白い。「臨界点」とは、広辞苑によれば、「さかい」「境界」そして「物理的性質が不連続的に変わる境界」とある。熟れきった柿の実が次第に重さを増し、落下のぎりぎりまできているのだろう。いつ落ちてもおかしくない状況なのである。もし地面に落ちれば実は崩れてしまうだろう。

ユダになる危ふさ我に黒葡萄 藤原はる美

ユダは、イエスに選ばれた弟子の一人でありながら、銀貨三十枚と引き換えにイエスを裏切り、接吻を合図にイエスを敵の手に引き渡したとされ、その名は今も「裏切り者」の代名詞となっている。黒葡萄というと先師登四郎の「敵手と食ふ血の厚肉と黒葡萄」の句を思い出すが、先師の句もこの藤原さんの句も共通しているのは、「敵手」とか「危ふさ」といった日常の安穩とした世界よりも強烈で刺激的な、言葉が使われていることだ。人間はだれもがユダのような原罪意識を持っていることを詠んでいる。

ゼブラゾーン色なき風がまづ渡り 峰 幸子

ゼブラゾーンというのは、道路の右折レーンなどがあつた時その滞留を促すために設けられた白線が幾重にも引かれている所で、普通はその上は通行出来ないとところであるが、マナーの悪い運転手などは、平気でその上を通行してしまう。作者もどなたかの車に乗された時に感じられたことなのだろう。過密な道路上であっても、空白の部分でも言うのか、そこを秋の風が吹き渡っていたのであるが、それを「色なき風」と表現したのもこの句の場合適切であつた。

(以下略)